

第4節 基本層序と縄文土器の分類

1 基本層序

図34は、中央トレンチと南北トレンチの西壁の土層断面図をつないだ、縦と横の比率の異なる模式図である。層位の名称は、発掘調査時の層位名を用いており、統一はしていない。

地表面の標高は、中央トレンチがおおよそ31m、南北トレンチがおおよそ31.2mである。基盤となるハードローム層は、18N・O区が標高おおよそ30.6mでもっとも高く、地表下おおよそ60cmで顔を出す。ハードローム層はそこを中心に南北に傾斜して下がって堆積しており、18Q区ではハードローム層の上にソフトローム層が堆積する。ソフトローム層の最上部である2層には、加曽利B式土器が含まれる。18V区でハードローム層は標高29.5mほどであり、18N区との間に1m以上の差があるが、ソフトローム層の表面はほぼ平坦である。その上には1a・1b層という褐色土層が堆積し、最上層が耕作土である。

18N区から北はハードローム層が深く、18J区の深堀地点では標高おおよそ28.5mで顔を出した。18N区のハードローム層最上位からおおよそ2m低いので、ハードローム層はおおよそ12mの間でかなり急激に傾斜していることになる。中央トレンチのハードローム層の表面は標高おおよそ28.2mであるので、18J区からは緩やかに傾斜していっているようである。その上におおよそ4枚のそれぞれが何層かに分かれる暗褐色～黒褐色土層が斜めに厚く堆積している。これらは加曽利B式～堀之内1式の縄文後期の遺物包含層である。その上に2層がほぼ水平に堆積しており、18J区の北端から北に向って縄文晩期終末の貝層が斜めに形成されている。

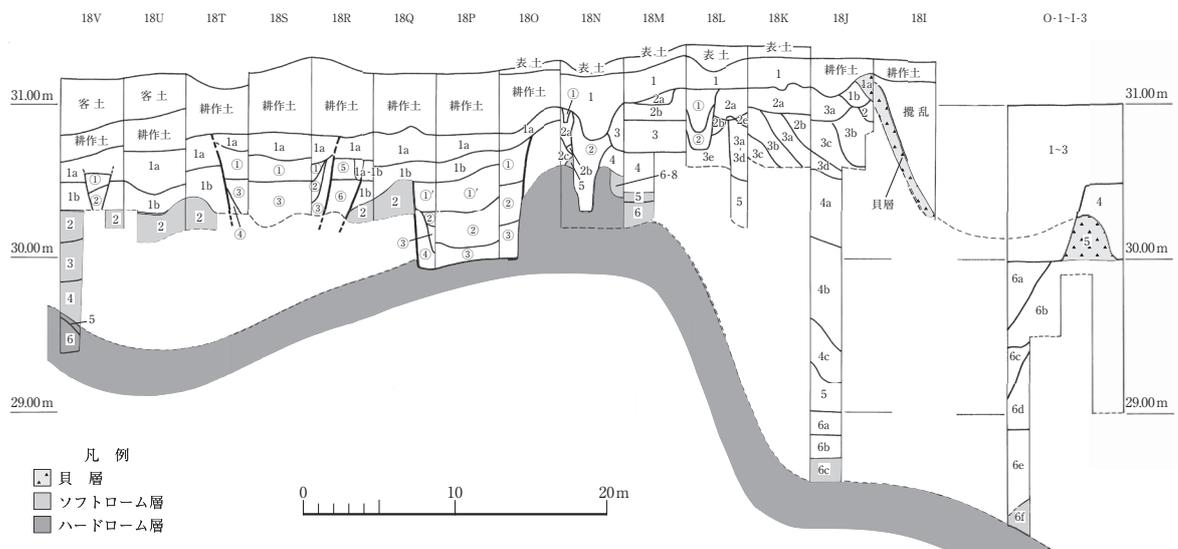


図34 南北トレンチの土層断面模式図

2 出土土器の分類

次章以降に述べる出土遺物のうち、多量で複雑な内容をもつ縄文土器をあらかじめ分類しておく。縄文土器は早期から晩期終末に及び、時期ごとに第Ⅰ群～第Ⅹ群に大別した。細かな時期差や特徴によって1類、2類…と細別し、さらにそのなかをA種、B種…と細分した。ここでは類別までを示し、問題になる第Ⅹ群については種の内容まで記述する。各類型の代表的なものを、図42以降の出土土器のうちから選んで(番号)に示した。

第Ⅰ群土器：縄文早期

第Ⅱ群土器：縄文前期

第Ⅲ群土器：縄文中期前半（五領ヶ台式、阿玉台・勝坂式）

第Ⅳ群土器：縄文中期後半（加曾利E式）

第Ⅴ群土器：縄文後期前半（称名寺式、堀之内1式）

1類：曲線的な磨消縄文、列点により構成される（1799・1801）。

2類：口縁部に沈線や突起をもち、胴部は縄文を地文として沈線文で曲線を描く（1817）。

3類：櫛歯状工具によって条線を描く（1433）。

第Ⅵ群土器：縄文後期中葉（堀之内2式、加曾利B式）

1類：帯縄文をもつバケツ状の深鉢（1845）。

2類：口縁が内湾し、口縁に平行沈線をもつ（1847）。

3類：繊細、細密な集合沈線文（1848）。

4類：内面に平行沈線文などをもち、外面が無文の浅鉢（1850）。

5類：頸部がゆるくくびれる鉢で、磨消縄文をもつ（1852）。

6類：頸部が屈曲し、外反口縁とふくらむ胴をもつ鉢。口縁に縄文帯をもつ（2093）。

7類：斜、格子目状、矢羽根状の集合沈線や条線文（1616）。

8類：体部から屈曲内湾する口縁をもつ鉢。口縁端部に列点をもつ程度の素文（1864）。

9類：口縁に3単位の突起をもつ鉢（1866）。

10類：ソロバン玉状の深鉢の系譜（1992）。

11類：丸みをもつ鉢（2003）。

12類：頸部が屈曲し、頸胴界に列点ある沈線を加え、胴部に磨消縄文を加える（1341）。

13類：縄文のみ（1888）。

14類：紐線文（1897・1901・1915）。

15類：縄文地に斜格子の細い沈線文を加えたもの（2131）。

第Ⅶ群土器：縄文後期後半（曾谷式～安行2式）

1類：隆起帯縄文以前（2106）。

2類：細い隆起帯縄文（2138）。

3類：太い隆起帯縄文で、瘤に刻み目はない（2252）。

4類：太い隆起帯縄文で、瘤に横の刻み目がある（2267）。

5類：紐線文（2289）。

第Ⅶ群土器：縄文晩期前半（安行 3a～3b 式）

1類：扁平な隆起帯縄文（2568）。

2類：口縁外傾縄文帯（1618）。

3類：カーテン文（731）。

4類：列点文（2694）。

5類：紐線文土器とその流れをくんだ砲弾形の深鉢（2295・1661）。

6類：無文（1670）。

7類：大洞系（2691）。

第Ⅸ群土器：縄文晩期後半（安行 3c～3d 式，前浦Ⅱ式）

1類：米粒状列点文や二段杵状文などをもつ（1098・1226）。

2類：太い沈線で区画された磨消縄文をもつ前浦Ⅰ式（45）。

3類：太い沈線で区画された磨消縄文をもつ前浦Ⅱ式（1086）。

4類：大洞系（1682）。

5類：撚糸文（337）。

6類：無文。

第Ⅹ群土器：縄文晩期終末（桂台式，千網式，荒海式）

【精製土器】

1類：磨消縄文を伴う工字文（2430）。

2類：隆線工字文（1686）。

3類：浮線網状文（1691）。

4類：縄文。

5類：沈線文（851）。

【半精製土器】

6類：8類甕の，頸部や胴部に沈線文を加える。条痕を欠いたものもある（571）。

【粗製土器】

7類：撚糸文の土器。

深鉢：バケツ状で屈曲がない。

A種）折り返し口縁。A1種は折り返し部分が丸みをもって，下の器面に被っている（1695）。

A2種は折り返し部分の境が稜をなす程度のもの（337）。

B種）口縁下に一条の太い凹線を加えたもの（1698）。

C種）単純な口縁のもの（1699）。

甕：胴部が屈曲する。

A種）折り返し口縁。A1種は折り返し部分が丸みをもって，下の器面に被っているもの（1704）。A2種は痕跡的になっている（1709）。

B種）口縁下に一条の太い凹線を加えたもの（1708）。

8類：条痕文の土器。

深鉢：バケツ状で屈曲がない器形。

A種) 折り返し口縁。A1種は折り返し部分が丸みをもって、下の器面に被っているもの(726)。

A2種は折り返し部分の下端をなぞって浮き立たせたもの(741)。A3種は折り返し部分の境が稜をなす程度のもの(706)。

B種) 口縁の折り返し部分が短く、一条の沈線を加えたときもの(300)。

C種) 単純な口縁のもの(261)。

甕：胴部が屈曲する器形。

A種) 折り返し口縁。A1種は折り返し部分が丸みをもって、下の器面に被っているもの(747)。

A2種は折り返し部分の下端をなぞって浮き立たせたもの(1755)。A3種は折り返し部分の境が稜をなす程度のもの(745)。a4種は口縁の外反度が強いもの(456)。

B種) 口縁端部が外方に突出するもの(452)。

C種) 単純な口縁で、口縁部は無文のもの。C1種は口縁の外反度が弱いもので、口縁には突起が付くものがある(453)。C2種は口縁の外反度が強いもので、大きな波状口縁をなすものがある(288)。

d種) 単純な口縁で、全面に条痕を施したもの(81)。

9類：無文土器(1775)。

(設楽)

文献

- 岡村道雄ほか 1987『里浜貝塚Ⅵ—宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅵ—』東北歴史資料館。
- 小川和博 1980「縄文時代の房総と成田—市内の遺跡—」『成田市史』通史原始古代編, 134-331頁, 成田市。
- 小川和博 1992「成田の貝塚」『成田市史研究』第16号, 65-93頁, 成田市教育委員会。
- 柿沼修平・青木幸一 1983「千葉県下総町龍正院(大原野)貝塚の調査+下総における縄文時代晩期終末の研究—」『奈和』第21号, 37-55頁, 奈和同人会。
- 小池裕子 1973「貝類の研究法—貝類採集の季節性について—」『考古学ジャーナル』80, 14-19頁, ニュー・サイエンス社。
- 杉原重夫 1980「成田市の土地の生いたち」『成田市史』通史原始古代編, 31-68頁, 成田市。
- 鈴木公雄 1989「貝塚の考古学」UP考古学選書5, 東京大学出版会。
- 鈴木正博 1985「荒海式」生成論序説『古代探叢Ⅱ』83-135頁, 早稲田大学出版部。
- 千葉県文化財センター 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)—東葛飾・印旛地区(改訂版)—』千葉県教育委員会。
- 中尾正己 1993「戦後の根本名川の改修と長沼干拓」『成田市史研究』第17号, 3-34頁, 成田市教育委員会。
- 奈和同人会 1987「—下総における縄文時代晩期終末の研究3—成田市宝田鳥羽貝塚の調査—付—鳥羽貝塚の動物遺存体の概要(金子浩昌)」『奈和』第25号, 22-42頁, 奈和同人会。
- 西村正衛 1961「千葉県成田市荒海貝塚—東部関東地方縄文文化終末期の研究—(予報)—」『古代』第36号, 1-18頁。
- 西村正衛 1974「千葉県成田市荒海貝塚(第一次調査)」『早稲田大学教育学部学術研究』第23号, 25-56頁。
- 西村正衛 1975「千葉県成田市荒海貝塚(第二次調査)—東部関東における縄文後, 晩期文化の研究(その二)—」『早稲田大学教育学部学術研究』第24号, 1-25頁。
- 西村正衛 1976「千葉県成田市荒海貝塚(第二次調査)—東部関東における縄文後, 晩期文化の研究(その二 続き)—」『早稲田大学教育学部学術研究』第25号, 15-28頁。
- 西村正衛 1984「石器時代における利根川下流の研究—貝塚を中心として—」早稲田大学出版部。
- 西村正衛・江崎 武・馬目順一・平野吾郎・原 信之・大久保 進・戸田 健 1965「関東地方における縄文式最後の貝塚—千葉県成田市荒海貝塚—」『科学読売』27-39頁, グラビア写真。
- 藤下昌信・喜多圭介・寺内博之 1984「—下総地方における縄文時代晩期終末の研究(2)—千葉県成田市殿台遺跡の

-
- 調査—縄文時代晩期の遺構と遺物を中心として—『奈和』第 22 号, 1-23 頁, 奈和同人会。
- 港区伊皿子貝塚遺跡調査団編 1981『伊皿子貝塚遺跡』日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会。
- 早稲田大学考古学研究会 1962「千葉県成田市荒海貝塚第二次発掘調査概報」『金鈴』第 15 号, 1-17 頁。
- 渡辺修一 2007「荒海 2 式の研究—浮線文直後の土器群—」『千葉県立中央博物館研究報告人文科学』第 10 巻 1 号, 1-20 頁。